
闇空 ~ Dark sky ~

紅佐洲飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇空 ～Dark sky～

【Nコード】

N2145F

【作者名】

紅佐洲仮

【あらすじ】

東都オフィスカンパニーの事件から3ヶ月が経った。コナンは蘭と小五郎と哀と博士と歩美と光彦と元太達と園子に誘われて、園子の父親の知り合いの人の誕生日を祝う為にその人が所有する豪華客船で行われる誕生日パーティーに来ていた。そのパーティーで殺人事件が発生。警視庁捜査一課の目暮達が見つけに来る。船と言ふのは海の密室で誰が殺したのか……？それから数日後、哀の元に一本の電話が掛かって来る。組織からの冷酷な電話……。ついに、哀の正体がばれたのか？更に、船で起こった事件に組織が関わっている

事が発覚する。FBIも事件に加わり組織を追う。コナンと哀に近
づく組織の間…。組織との戦い長期シリーズ第2部！

第0章 くプロローグく（前書き）

こんにちは紅佐洲飯です。

今回の話は一応は『閉ざされた裏』の続編です。今回は組織が少し絡みます。更に、『閉ざされた裏』で出て来た女性が出てきます。

それと、『想い出の瞳』もよろしくお願いします。

第0章 くプロローグく

空には真つ暗に為り、月が真つ暗な空に現れる。星が無数に空に輝いている。夜は人の闇を写す。人々は闇と言う夜に飲み込まれて行く。

とあるビルの地下駐車場に一人の女性が歩いている。駐車場には彼女が履くヒールの音が響く。駐車場には沢山の車が止まっている。彼女は自分の車を見つけ、車に近づき、その車の鍵をポケットから出して、その車に乗り込んだ。

車に乗り込んだ彼女は助手席に置かれている新聞に目を移した。新聞の大きな一面には『東都オフィスカンパニーの会長と社長逮捕』と大きな字で書かれていた。それは3ヶ月前に起きた大きな事件だった。

最初、杯戸公園で一人の男性が殺された事が発端となった事件。その事件の裏には東都オフィスカンパニーの裏取引の事や、国会議員との関わりもあった。それから1ヶ月後には東都オフィスカンパニーは倒産した。

彼女は新聞から目を離し、車のエンジンを掛けた。車のエンジン音が地下駐車場に響き、彼女は車を発進させて地下駐車場の出口に向かって行った。

第1章　く冬の水平線く

東京の街は休む事はない……。一日の回転は休む事がない……。オフィ
スビルが建ち並び、車の騒音は止む事なく、ネオンの明かりは消え
る事はなく、人の歩みを止める事がない。

夜の東京は明るく寝る事も許さないような明るさだ……。東都環状線
が走る橋の下の道路に一台のポルシェが止まっている。この闇の夜
空に似合うような黒い車体をしている。その車には二人の男が運転
席と助手席に座っている。両方の男は上から下まで真っ黒な服を来
ている。

「……………」。

助手席には黒の組織の一員でコードネーム……『ジン』と言う男が
座っている。その時、ジンの携帯が鳴った。ジンはポケットから携
帯を出して電話に出た。

「…俺だ。そつちの様子はとうだ？」

ジンは電話相手に尋ねた。

「そうか…。明日、予定通りに始末しろ。失敗は許さねえ…。」

ジンはそう言い、携帯を切った。

「明日、やっちまうんですかい？」

運転席に座る男、同じく黒の組織の一員でコードネーム…、『ウォツカ』が尋ねた。

「ああ…。」

ジンはそう言い、煙草を出して煙草に火をつけた。

大海原を航海する豪華客船…、この豪華客船は守屋財閥の会長、守屋繁宏が所有する船である。今回、この豪華客船で守屋繁宏の誕生日パーティーが行われる。

「何で海の上でパーティーなんかやらなきゃならねえんだよ。しかも、12月のこんな寒い時に…」

コナンは不満を漏らしながら海を見ている。

「文句を言うのならこの船で誕生日を祝いたって言った会長に言ったらどうなの？」

コナンの横に居る哀が尋ねた。

「しかし、あいつらは元気だな。」

コナンは目線を海から元太達に移した。

「みんな、もうすぐパーティーが始まるよ。」

蘭が大きな声でコナン達に言った。

「もう、パーティーの時間か…」

コナンは腕時計を見た。

「さあ、パーティー会場に行こう。」

蘭はそう言くと、船内に入って行った。コナン達も蘭の後を追って船内に入って行った。

第2章　く繋がりに

豪華客船の食堂で守屋繁宏の誕生日パーティーが行われる。守屋繁宏は今年で70歳になった。パーティー会場には芸能人や著名人や政治家等が沢山来ていた。

「流石、守屋繁宏の誕生日パーティーだ。有名人が沢山来てるぜ。」
小五郎はパーティー内を見渡して言った。

「守屋財閥は結構大きな財閥だし、守屋繁宏会長はいろんな人と関わりがあるからね。」
園子が自慢げに話した。

「おお、園子ちゃんじゃないか。」
一人の男性がコナン達に近付いて来た。

「あ、繁宏おじ様久しぶり。」

「ああ…、久しぶりだね。確か…、前に会ったのは1年前だったかな？」

繁宏が園子に尋ねた。

「うん、そうよ…。」

「そういえば、今日はお父さん達は？」

繁宏が辺りを見回した。

「パパ達は急用で来れなくなったから私の知り合いを招待したの。」

「初めまして…。」

蘭達が繁宏に挨拶した。

「おや？貴方は確か…？」

繁宏が小五郎の方を見て言った。

「毛利小五郎です…。」

「やっぱり、あの有名な眠りの小五郎でしたか。」

繁宏が嬉しそうに言った。

「…皆さん、今日は楽しんで行って下さい。」

繁宏はそう言い、コナン達から離れて行った。

「え？東都オフィスカンパニーですか？」

助手席に座るFBI捜査官のジョディが手に持ってた書類から目を離した。

「ああ…、そうだ。君も知ってるだろ？」

車を運転するジョディの上司で、FBI捜査官のジェームズが尋ねた。

「ええ…、数カ月前にその会社の会長と社長が逮捕されたってニュースで大きく取り上げてましたから…。しかし、それがどうかしたんですか？」

ジョディは疑問に思い尋ねた。

「その会長と社長が逮捕された理由は知ってるかね？」

「殺人事件の容疑ですよ？確か殺されたのは東都オフィスカンパニーの社員で、会長が雇った殺し屋に殺されたって…。」

ジョディが思い出しながら言った。

「その社員が殺された理由は東都オフィスカンパニーの裏事情を知った事…。」

「東都オフィスカンパニーが拳銃の密輸や麻薬の取引や裏金等をやってた事をその社員が知り、口封じの為に殺された…。この事件がどうかしたんですか？」

ジョディはジェームズに尋ねた。

「どうやら東都オフィスカンパニーは組織に金を渡していたようだ。」

「ジェームズがさらりと答えた。」

「その情報は確かなんですか？」
ジョディの表情が少し変わった。

「情報は確かだよ。だが、組織とは余り深く関わってなかったようだ。」

「警察はその事を知ってるんですか？」

「いや、知らないようだ。それに、彼等が自分達の事を知られるようなへまはしないだろう。」

「……………」

ジョディは黙って何も言わなかった。その時、ジョディの携帯が鳴った。ジョディはポケットから携帯を出した。

第3章 　悲劇

携帯を開くと、ディスプレイ画面には非通知と表情されていた。ジョディは少し不安そうにした表情をしながら電話に出た。

「はい…、もしもし…。」

ジョディは電話に出た。

「私…、水無怜奈よ。」

電話の相手は黒の組織に潜入したCIA諜報員の水無怜奈からだった。

「怜奈さん、どうしたの？」

ジョディが驚いた表情をした。ジェームズは車を運転しながらちろっとジョディの方を見た。

「余り時間がないから単刀直入に言うわ。今夜、8時30分に組織が誰かを殺すわ。」

「誰かって誰を…？」

「それは分からないけど…、今夜どこかのパーティーに出席している人よ。」

「パーティーって何のパーティーなの？」

「それは貴方達で調べてちょうだい。じゃあ、もう切るわよ。」
怜奈はそう言い、電話を切った。

「電話、彼女からかね？」

ジェームズが電話を切れた事を確認してから尋ねた。

「ええ…、組織が今夜の8時30分にパーティーに出席している誰かを殺すみたいです。」

ジョディは怜奈からの情報をジェームズに伝えた。

「時間だけは確実に分かっているのに、ターゲットが分からないとはな…。」

ジェームズが運転しながら考えた。

「今夜、パーティーが行われている場所を調べます。」

ジョディはそう言い、携帯で何処かに電話を掛け始めた。

「うつめえ…、光彦お前も食ってみろよ。うまいぞ…。」

元太が叫ぶような声で言った。

「元太君、君は食べる事以外に考えられないんですか？」
光彦が呆れながら尋ねた。

「しょうがねえだろう…、うまいんだから。」
元太はそう言いながら食べ物をお口の中に入れた。

「もう8時半か…。」
コナンは自分の腕時計を見て言った。

パリーン…

何かが落ちた音がした。

「うわああああ…。」
何かが落ちた音がした数秒後に、守屋繁宏の叫び声が聞こえた。その後、繁宏は床に倒れた。

「会長、会長、どうしたんですか？」
近くの社員が繁宏の体を揺すった。

「駄目だ…。もう死んでる。」
小五郎が繁宏に近付いて呟いた。

「蘭、警察に連絡だ…。」

「分かった…。」

「皆さん、警察が来るまで此処から一步も出ないで下さい。」
小五郎がパーティー客全員に聞こえる様に言った。

「……………」

コナンは黙って繁宏の死体を見ていた。

第4章　　自殺？殺人？

夜の世界が広がる空をヘリコプターが一台飛んでる。今、ヘリコプターは海の上を飛んでいる。ヘリコプター目の前に豪華客船が見えて来た。

豪華客船のヘリポートに小五郎とコナンと船員等が立っている。その時、ヘリコプターがヘリポートに着陸した。ヘリコプターのドアが開いて目暮警部、高木刑事、佐藤刑事、千葉刑事達がヘリコプターから降りて来た。

「お待ちしました、警部殿。」
小五郎が目暮に言った。

「また、君かね…。どうして君が行く所、行く所に事件が起きるんだね？」

目暮が呆れながら小五郎に尋ねた。

「いや、何ですかね？」
小五郎が逆に目暮に尋ねた。

「死亡したのは守屋繁宏さん70歳…。守屋財閥の会長です。」
高木が繁宏の死体の近くに立ちながら言った。

「死因は青酸カリによる中毒死です。今日はこの船で守屋繁宏さん
誕生日パーティーが行われていました。」

「…それで、最初に会長の異変に気付いたのは？」
目暮が辺りを見回しながら尋ねた。

「私です…。」
一人の社員が手を挙げた。

「では、その時の様子を話して下さい。」
目暮がその社員に言った。

「は、はい…。私は会長に横にずっと居ました。会長が亡くなる前に会長が喉が渴いたって言ったのでワインが入ったグラスを取りに行き、ワインの入ったグラスを会長に渡しました。」
社員が目暮に説明した。

「警部、会長の死体の近くにワイングラスが落ちてます。」

高木が目暮に伝えた。

「会長が飲んだワインはこれが…。」

「グラスにワインが少し残ってますね。」
千葉がワイングラスを見た。

「鑑識さん、このワイングラスを調べて下さい。」
目暮が鑑識官に伝えた。

「…皆さん、これから事情徴収を行いますので、これから私達の指示に従って下さい。」

目暮がパーティー客に聞こえる横に言った。

「（もし、自殺じゃなければ…、犯人はこの船の中に居る。しかし、こんなにも沢山の人が居る場所でどうやって殺したのか？）」

コナンは繁宏の死体をじっと見ていた。

「コナン君、行くよ。」

蘭がコナンの手を握り歩き出した。

「うん…。」

コナンは歩きながら死体の方をちらつと見た。

「哀ちゃん、早く行こう。」

歩美が哀に近付いた。

「ええ…、そうね。」

哀と歩美は蘭達の後ろを歩き出した。

「……………！」

哀は急に立ち止まった。

「どうしたの？哀ちゃん…。」

歩美が不思議に思い尋ねた。

「（プレッシャーを与えるような威圧感…、冷たいオーラを漂わせる感覚…、）」

哀は少し怯え始めた。

「（居る…、此处に彼等の仲間が…。）」

哀の周りをパーティー客が沢山歩いて行く。

第5章　く7人の容疑者く

船員達やパーティー客の事情徴収は3時間程度で終わった。パーティー客はパーティー会場に待機させられ、船員達は持ち場に帰った。目暮達は事情徴収の為に使った部屋に居る。

「それで、どうでした？」

小五郎が目暮に尋ねた。

「船員達は二人以上で行動をしていたからアリバイがあった。パーティー客も二人以上で行動している人が多かった…。」
目暮が小五郎の質問に答えた。

「じゃあ、全員にアリバイがあったんですか？」

「いや…、7人だけアリバイがなかった。」

「その7人って誰なの？」

小五郎の隣に居たコナンが尋ねた。

「えーと、1人目は会長の世話係の河下昇さん。」

「世話係って何を…？」

「車の運転手等をやってるって言うてました。」
目暮の後ろに居る高木が答えた。

「2人目は間宮麗子さん。会長の秘書をしている様だ。3人目は部長の下屋徹さん。4人目は小説家の清水佳奈子さん。」

「清水佳奈子って有名な小説家じゃないですか。」
小五郎が声を上げて言った。

「最近、清水佳奈子の小説がドラマ化されて名前を良く聞きます。」
高木がさらりと言った。

「5人目は俳優の加賀見晋也さん。6人目は画家の天王寺作次郎さん。7人目は女優の山本由里さんだ。この7人にはアリバイがない。」

「（…この7人の中に繁宏さんを殺した犯人が居る可能性が高いな。）」
コナンは心の中で考えた。

「ねえ、この7人は何て言ってたの？」

コナンが目暮に尋ねた。

「河下さんはトイレに行ってたって言ってたな。」
目暮が腕を組みながらコナンの質問に答えた。

「秘書の間宮さんは部屋に戻って明日の会議の書類をパソコンで作成して居たと言っていました。」
続いて高木が答えた。

「下屋さんは気分転換の為にデッキに出ていたそうだな。清水さんは気分が悪いって言って部屋で休んでたみたいだ。加賀見さんは船の中をぶらぶら歩いてた様だ。天王寺さんは部屋で絵を書いてたみたいだ。山本さんは船の中にあるバーに居たみたいだ。」

「全員、誰とも会わず一人で居たみたいです。」

高木がコナン達に伝えた。高木がそう言い終えた時、ドアが三回ノックをされて千葉が入って来た。

「警部、もうすぐ港に着きます。」

「分かった…。」

目暮はそう言い、ドアに向かって歩き出した。

「事件の捜査は明日から始める。毛利君、何か分かったら直ぐに連絡してくれ。」

目暮はそう言い、部屋から出て行った。

第6章　可能性

船が港に着き、パーティー客は船から降りた。

「事件が起きなければもうちょっと食いもんが食えたのによ。」
船から降りた元太が不満そうに言った。

「しょうがないよ…、人が亡くなったんだから…。」
歩美が少し疲れた顔をしている。

「犯人は直ぐに捕まるじやろう。警察が捜査をする様じゃし…。」
博士は歩美達にそう言った。

「犯人、早く捕まると良いですね。」
博士の後に光彦がそう言った。

「……………」
コナン達の後ろを哀が俯きながら歩いている。

「どうしたの…？哀ちゃん。」
歩美が心配そうな顔で哀を見ていた。

「何処か具合でも悪いんですか？」
光彦も哀の方を見ていた。

「……………」
哀は顔を上げて歩美達の方を見ている。

「どうした灰原…？」

コナンも少し心配をしている。

「……何でもないわ。」

哀はそう言って少し笑みを見せた。

翌日、天気は曇り空で雨が降りそうな天気だ。とある駐車場に止めてある車の中でジェームズは運転席に座って空を見ている。その時、助手席側のドアが開いてジョディが車に乗った。

「新聞を買って来ました。」

ジョディが新聞を持ちながら言った。

「……もし、彼女の情報が正しければ誰かが殺されてる筈だ。」

「……………」

ジョディは真剣な表情で新聞を隅から隅まで記事を見ている。

「ジェイムズ、一つ該当する事件がありました。」

「見つかったかね？それで、どんな事件だね？」

「被害者は守屋財閥の会長の守屋繁宏さん。昨日の夜、8時30分頃に彼の誕生日パーティー中に亡くなった。警視庁では殺人事件として捜査を開始した。」

ジョディは新聞の記事を読んだ。

「…どうやら、その事件で正解の様だな。それで、パーティーは何処で行われていたんだね？」

「それが…、そのパーティーは船で行われていたみたいです。」

「…じゃあ、その船の中に組織の人間が居た可能性が高いな。」

「調べたら…、彼等を捕まえられるチャンスですね。」

ジョディが少し笑みを浮かべた。

第7章　く非情な電話く

船での事件から2日が経った。

「あれ、コナンは？」

小五郎はテレビを見ながら椅子に座っている。

「コナン君なら朝から遊びに行ってるよ。」

蘭は箒で床を掃きながら答えた。

「…此处だな。やっぱり財閥の会長の家はでかいな。」
今、コナンは守屋繁宏の家の目の前に来ていた。

「とにかく、色々聞いてみるか。」

コナンはそう言い、インターホンを押そうとした時…、

「あれ、コナン君？」

背後から知り合いの声が聞こえて来た。コナンはインターホンを押さずに後ろを振り返った。

「高木刑事、佐藤刑事どうして此処に？」

「捜査よ…。コナン君が此処に居るって事は君も事件の捜査をしているのね。」

佐藤は少し呆れた顔を見せた。

「…ちよつと気になって。」

「しょうがないわね…。」

「佐藤さん、とにかく聞き込みをしましょう。」

「…そうね。被害者の家族なら何か分かるかもしれないしね。」
佐藤は守屋繁宏の家の方を見た。

「…警視庁の佐藤です。こちらは高木です。」

「高木です…。」

「その坊やは…？」

ソファーに座る女性はコナンの方を見た。

「あ、この子は私達の助手みたいなものです。」
佐藤は少し焦った声を出した。

「初めまして、江戸川コナンです。」
コナンはその女性に挨拶した。

「私は繁宏の妻の香奈子と言います。こちらは家政婦の隅田です。」
ソファーに座る香奈子に横に立つ隅田を紹介した。

「……………」

隅田は黙って頭を下げた。

「皆さん、どうぞ座って下さい。」
香奈子がそう言うと、佐藤と高木とコナンはソファーに座った。

阿笠邸では哀が一人で紅茶を飲んでいる。今、博士は出掛けていて家には哀しか居ない。哀は雑誌を読みながら紅茶を飲んでいた。その時、家の電話が鳴った。哀は面倒そうな顔をしてソファから立ち上がり、受話器を取った。

「はい…、阿笠ですけど…。」
哀は電話相手に言った。

「………………。」
電話相手は何も言わなかった。

「もしもし…？どちら様ですか？」
哀は少し苛立ちながら尋ねた。

「…やっと見つけたわ、シェリー。」
非情な声が受話器から聞こえて来た。

第8章　く気配く

「…やっと見つけたわ、シェリー。」

「……………!!」

哀は驚いて受話器を落としそうになった。

「…驚いて声も出ないかしら？」

受話器から冷酷な女の声が聞こえて来た。

「…何処かと間違えて電話してるんじゃないんですか？」

哀は冷静さを保ちながら尋ねた。

「米花町2丁目22番地、そこに住んでるのよね？シェリー…。」

「…何が目的なの？」

哀は恐る恐る尋ねてみた。

「我々、警察はこの7人が守屋会長を殺した可能性がある」と踏んで捜査をしています。」

佐藤はポケットから容疑者7人の写真をテーブルに並べた。

「この7人の中に会長を恨んでいる人とか居ませんでしたか？」

高木は香奈子に尋ねた。

「いえ…。主人は家では会社の事や仕事の事は話しません。それに、私はこの7人とは余り会った事はありません。」

香奈子は残念そうに答えた。

「…隅田さんはどうですか？」

佐藤は今度は隅田に尋ねた。

「私も奥様と一緒に分かりません。繁宏さんは家では会社の話しや仕事は家には持ち込みません。」

隅田が佐藤達にそう言った。

「じゃあ、会長さん変わった様子とかなかった？」
今度はコナンが尋ねた。

「私からはそんな様子はありませんでした。隅田さん、主人の様子はどうでした？」

「私も何時もと同じだったと思います。」

「…そうですか。」

高木が小さな声で言った。

「じゃあ、何か分かりましたら私達に連絡下さい。」

佐藤はそう言い、ソファから立ち上がった。それに続いて高木とコナンもソファから立ち上がった。

「分かりました…。何か分かりましたら連絡します。」
香奈子は佐藤達にそう言った。

「結局、何も分かりませんでしたね。」

守屋邸を出た高木が最初に口を開いた。

「じゃあ、次は会社の方に聞き込みをしましょう。」

「コナン君、君も来るのかい？」

高木が後ろを歩くコナンに尋ねた。

「うん…。」

コナンは満面の笑顔を見せた。

「……………」

笑顔を見せた瞬間、コナンは立ち止まった。

「どうしたの？コナン君……」

佐藤がコナンに近付いて尋ねた。

「誰かに見られていた様な気がしたんだ……」

「気のせいじゃないの？」

佐藤がコナンに尋ねた。

「……………」

コナンは黙って何も答えなかった。

「とにかく、行きましょう。」

佐藤はそう言い、歩き出した。コナンは少し気になりながら佐藤の後ろを歩き出した。電信柱の後ろに人の影が映っている。

第9章　く無駄足く

守屋邸を出たコナン達は佐藤の車で守屋財閥の会社にやって来た。

「私は社長の茂山と言います。」

茂山はポケットから名刺を出して佐藤と高木に渡した。

「警視庁の佐藤です。」

「高木です…。この子は江戸川コナン君と言います。」

高木は横に居るコナンを茂山に紹介した。

「皆さん、ソファアーに座って下さい。」

茂山はそう言い、ソファアーに座った。コナン達もソファアーに座った。

「…会長の事件で来られたんですね？」

「ええ…、そうです。私達警察はこの中に犯人が居ると思ってます。」

佐藤はポケットから容疑者7人の写真を見せた。

「…それで、私に何を聞きたいのですか？」

茂山は一通り写真を見た後、佐藤に尋ねた。

「最近、会長に変わった事はありませんでしたか？」

「いえ…、私の知る限りではそんな事ありません。」

「この写真の中に会長を恨んでいる人はいませんか？」
今度は高木が茂山に尋ねた。

「さあ…、私も社長と言っても会長の事は全てを知ってるわけでは
ありません。それなら、河下さんや間宮さんの方が詳しいと思います。
す。二人は世話係と秘書ですから…。」

「…そうですか。」

「私はこれから会議がありますので…。」
茂山はソファから立ち上がった。

「何か思い出したら連絡下さい。」

「分かりました…。」

「結局、無駄足だったみたいね。」
佐藤が腕を組みながら歩いていった。

「そうですね…。」

高木は少し疲れた顔をした。

「コナン君、家まで送って行くわ。」

「ありがとう、佐藤刑事。」

コナンは笑顔を見せた。

佐藤の車でコナンは探偵事務所の目の前まで送ってもらった。

「ありがとう…佐藤刑事、高木刑事。」

コナンは車から降りて佐藤と高木に御礼を言った。

「じゃあね、コナン君。」

佐藤はそう言い、車を発進させた。

「（会社に聞いても家に聞いても何も分からなかったか……。やっぱり、7人の容疑者に聞いてみるか。」
コナンは色々考えながら階段を上り始めた。

第10章 〈FBI〉

「…やっと見つけたわ、シェリー。」

「（あの言葉がずっと頭の中を回ってる。）」

「（どうして…、私の正体がばれたの？）」

「（…馬鹿ね、何時かは分かる事じゃないの。私には最初から……。
）」

「灰原…、灰原…。」

「え…？」

哀は閉じていた目を開けた。

「灰原、大丈夫か？」

横にはコナンが心配そうに哀の方を見ている。

「……………」

哀は何も言わず辺りを見回した。今は、授業中で算数の授業を受けている。

「どうしたんだ？気分でも悪いのか？」

コナンが更に哀に尋ねた。

「大丈夫よ……。余り寝てないだけよ。」

「……ったく、また研究してたのか？あんまり無茶すんなよ。」
コナンは少し呆れながら言った。

放課後になり、生徒達は下校し始めた。コナンは歩美達に用事があると言って一人で学校を出た。

「えーと、今日は河下さんを尋ねてみるか。河下さんは会長の世話係って言ってたから何か分かるかも知れねえな。河下さんが住んでいる場所は杯戸町か……。」

コナンはそう言い、米花駅に向かって歩き出した。

「（昨日、容疑者達の家を高木刑事に聞いというて良かったぜ。）」
コナンはポケットから手帳を出して、手帳を見ながら歩いている。

コナンの後ろから帽子を被った人物がコナンの後を付け始めた。

杯戸駅から降りたコナンは20分ぐらい歩いている。

「（やっぱり…、さっきから誰かに付けられてる。）」

コナンは後ろから付けて来る帽子を被った人物の方に一瞬だけ視線を移した。

「（学校を出てから付けてたな…。）」

コナンはそう言うと、少し笑みを浮かべた。コナンは急に走り出して、近くの曲がり角を曲がった。コナンの後ろを付けていた人物も走り出し、曲がり角を曲がった。

「……………！！」

曲がった瞬間、コナンが笑みを浮かべて待っていた。

「僕を付けて来て何か用事でもあるの？」

コナンはその人物に尋ねた。

「…流石ね。」

その人物はそう言い、帽子を外した。

「ジョディ先生…。」

コナンは驚いた表情を見せた。

「ハアイ、クールキッド。」

ジョディは元気な声でコナンに挨拶した。

「どうして僕を付けて来たの？」

「実はね…、私も守屋繁宏さん事件を捜査してるのよ。それで昨日、彼の家に行ったら君が刑事と一緒に家から出て来たから君も捜査に関わってる事が分かったから君を付けてたら何か分かると思ったのよ。」

「（昨日、守屋さんの家を出た後に感じた気配はジョディ先生のだったのか…。）」

「…でも、どうしてFBIがこの事件の捜査をしてるの？」
コナンが疑問に思いジョディに尋ねた。

第11章 〈情報〉

「実はね…、事件当日に水無怜奈さんから電話があつたのよ。」
ジヨデイが真剣な顔をした。

「どんな内容だったの？」

「…組織が夜の8時30分に誰かを殺すつて。それで翌日、新聞で調べたら守屋繁宏さんの事件が載つてたのよ。」

「それで、ジヨデイ先生が事件の捜査をしてるんだね。」

「ええ…。」

「じゃあ、その犯人が奴等の仲間つて可能性が高いんだね。」
コナンは笑みを浮かべた。

「…それで、君はこれから何処に行くの？」

「その事件の容疑者に会いに行くんだよ。」

「容疑者が分かつてるの？」

ジヨデイが少し驚いた顔をした。

「容疑者は7人、今から会いに行くのは容疑者の一人の河下さんだよ。」

「とにかく、その人の所に行きましょう。」

ジヨデイがそう言うと、コナンとジヨデイは歩き出した。

「このマンションだな…。」

コナンとジョーディは目的のマンションで立ち止まった。

「何で奴等は守屋さんを殺したのかな？」

「守屋さんも彼等の仲間だったかも知れないわね。」
ジョーディがさりとらった。

「……………」。

コナンは黙って何かを考えていた。

ピンポン…、

インターホンが鳴ってから部屋のドアが開いて河下が出て来た。

「君は…、毛利さんの所のボウヤだね？今日はどうしたんだい？」
河下はコナンの方を見た。

「河下さんに聞きたい事があつて…。」

「そちらの方は…？」

河下は今度はジョディの方を見た。

「私は毛利探偵の助手をしています。今日は事件の事を詳しく聞きたくて来ました。」

「とにかく、中へどうぞ。」

河下はコナンとジョディを家に招き入れた。

「どうぞ…。」

河下はテーブルの上にジュースが入ったコップとコーヒーが入ったコップを置いた。

「ありがとうございます。」

ジョディは河下に御礼を言い、コップを手に持った。

「事件の話ですよね？」

河下はコナンとジョディに尋ねた。

「河下さんは守屋会長の世話係でしょ？ だったら、会長の事に詳しく思っ…。」

コナンが一口ジュースを飲んでから河下に話した。

「まあ、会長の近くに居るのは僕と秘書の間宮さんぐらいだからな…。」

「最近、会長の周囲で怪しい人とか見かけてませんか？」
ジョディが河下に尋ねた。

「いえ…、見かけた事はありません。」

「じゃあ、事件があつた船で不審な行動をしている人とか居なかつ

た。」

今度はコナンが尋ねた。

「さあ、見かけてません。私も慌ただしく動いてましたから…。」

「そうですか…。」

ジヨディが残念そうに言った。

「最近、会長に変わった様子とかなかった？」

「そういえば…、事件が起こる2日前に会長が焦った声で誰かと電話をしてました。」

「誰と電話してたのかわかりますか？」

ジヨディが河下に尋ねた。

「それは分かりませんが、会長は焦りながら『何とかする』って言っていました。」

河下のマンションを出たコナンとジヨディは歩いていた。

「会長と電話をしていたのは彼等ね。」
ジヨディが最初に口を開いた。

「たぶんね…。でも、その話しが事実ならね。」

「彼等の仲間なら嘘をついてる可能性があるわね。」

第12章 くギムレットく

深夜、黒のポルシェが東京の街を走ってる。

「え、本当ですかい？」

助手席に座るウォツカが驚いた声を出した。

「ああ…、ギムレットがシェリーの居場所を見つけたみてえだ。」
車を運転しているジンが答えた。

「しかし兄貴、シェリーは何処に隠れて居たんですかい？」

「さあな…。シェリーの事はギムレットに任せるとあの方の命令だから詳しくは聞いてねえが、俺はあいつの情報は信用はしてねえよ。」

「ジンはさらりと答えた。」

翌日お昼頃、コナンは米花駅でジヨディと待ち合わせをしていた。
コナンが米花駅に着くと、ジヨディも同じ時間ぐらいに米花駅に着いた。

「今日は誰の所に行くの？」

「今日は画家の天王寺さんの所に…、他の人は都合が悪いから…」

「その人は何処に住んでるの？」

「米花町1丁目だよ…」

「近いわね…」

「じゃあ、行こう。」

コナンはそう言い、歩き出した。ジヨディも後に続いて歩き出した。

阿笠邸の電話が鳴り響いた。

「私が出るわ…。」

雑誌を読んでいた哀がソファから立ち上がった。

「すまんの…。」

博士はパソコンをしていた手を止めた。

「はい…、阿笠ですけど。」

哀は受話器を取り、電話に出た。

「こんにちはシェリー…、それとも今は灰原哀って言ったほうが良
いかしら？」

「何の用…？」

哀の表情が強張った。

「今から言う場所に来なさい。」

女はそう言い、電話を切った。哀は電話が切れた事を確認すると受
話器を置いた。

「博士、ちょっと出掛けて来るわ。」

「へえ、こんな普通の家に住んでるのね。」

ジヨディは目的の家を見て意外な顔をした。コナンはインターホンを押した。インターホンを押してから1分足らずで50代後半の男が出て来た。

「誰だね？あんなら…。」

「天王寺作次郎さんですか？」

ジヨディが男に尋ねた。

「いかにも。…で、あんならは？」

天王寺が再度コナン達に尋ねた。

「僕、江戸川コナンって言います。」

「私は毛利探偵の助手のジヨディと言います。」

「守屋会長の事件かね？」

天王寺がジヨディに尋ねた。

「はい…、毛利探偵が詳しく聞いて来いって言われまして…。」

「私は会長を殺していない。用が済んだら帰れ、私は忙しいんだ。」
天王寺はそう言い、ドアを閉めた。

「もう、話は聞いてくれそうにないみたいだね。」

コナンは閉まったドアを見つめた。

「今日は帰りましょうか？」

「そうだね……。」

コナンとジョディは天王寺の家から離れる為に歩き出した。

「コナン君、此处で何してるの？」

天王寺の家を出てからコナンとジョディの後ろから声が聞こえて来た。

「歩美……。」

後ろを振り返ると歩美が袋を持って立っていた。

「こんな所で何してるんだ？」

「お母さんのお使いで買い物に……。」

歩美は持っていた袋をコナンに見せた。

「コナン君は何してるの？」

「俺はこの人と散歩に……。」

「この人、コナン君のお姉さん？」

歩美が首を傾げながら尋ねた。

「この人は先生だよ。蘭姉ちゃんの高校の英語の先生だよ。」

「こんにちは……。」

ジヨデイが歩美に挨拶した。

「こんにちは。」

歩美が頭を下げた挨拶した。

「私、お使いの途中だから帰るね。また、学校でねコナン君。歩美はそう言い、走って何処かに行った。」

第13章 く手紙く

「おい、博士居るか？」

ジョディと別れたコナンは阿笠邸に来ていた。

「新一君、どうしたんじゃ？」

奥の部屋から博士が出て来た。

「この前、博士に頼んだスケボーを取りに来ただけど…、修理終わってるか？」

「ああ…、終わっとるぞ。」

博士はそう言い、スケボーを持って来てコナンに渡した。

「サンキュー、博士。」

コナンは御礼を言いながらスケボーを持った。

「余り無茶に扱わんでくれ。修理が大変なんじゃから…。」

「分かってるよ…。」

コナンはさざりと言った。

「…そういえば、灰原は？」

コナンが辺りを見回した。

「哀君なら出掛けたわい。」

「面白い物にか？」

「いや…、電話が掛かってから直ぐに出掛けたいじゃ。」

「……………」

米花町のとある廃倉庫の目の前まで来ていた。哀は廃倉庫のドアを開けて中に入った。

「来たわよ…。」

哀は倉庫に入り静かに言った。しかし、倉庫の中は静かなままだった。

「居るのなら出て来なさい。」

哀は少し声のトーンを上げて言った。またしても、何も聞こえて来なかった。

「（電話で来いって言った場所は此処の筈…。）」

哀は辺りを見回した。

ジリリリリリ…、

倉庫の中から目覚まし時計のアラームが響く。哀はアラームの聞こえる方に歩き出した。少し歩いて行くと、箱の上に目覚まし時計と紙が置かれている。哀が目覚まし時計に近付くとアラームは止まった。

「……………」。

哀は目覚まし時計の側に置いていた手紙を手にとった。

「……………！！」

その手紙を開いた瞬間、哀は驚愕した。

「そつえば、事件の方は何か進展はあったのかね？」
博士はソファ―に座って漫画を読んでるコナンに尋ねた。

「全然、警察も捜査をしているみたいだけで進展はしてねえみたいだ。」

コナンは漫画を読みながら答えた。

「（奴等が関わってる事はもう少し黙っておくか…。）」
コナンは少し考えながら思った。

哀はその手紙を強くにぎりしめてポケットに手紙を入れた。そして、哀は倉庫のドアを開けて外に出て行った。哀が倉庫から出て行った後、目覚まし時計が置いてある場所に誰かが近付いて来た。

「……………」。
その人物は目覚まし時計をポケットに入れて立ち去って行った。

第14章 雨

翌日は朝から雨が降っている。空には雨雲が覆い、太陽の陽射しを入れない様に遮っている。道路には水溜まりが出来て、車の走る音と融合して独特の音を出している。その音を聞きながらジョディはジェームズが運転する車の助手席に座って窓の外を見ている。

「…どうだね？事件の方は何か分かったかね？」
ジェームズがジョディに尋ねた。

「いえ…、彼等の事ですからそう簡単には…。」

「そうだな…。とにかく、もう少し頼むぞ。」
ジェームズが真剣な眼差しをしている。

「ええ…。」

ジョディも真剣な眼差しをした。ジェームズは車のスピードを上げて街を駆け抜けて行く。ジェームズの車が走って行く方向と逆の道路に一台の車が止まっている。その車の中に一人の女性が誰かと電話をしている。

「貴方に頼みたい事があるの…。」
電話をしている女性は黒の組織の一員『ベルモット』だ。

「ギムレットの事を調べてほしいのよ。貴方なら出来るでしょ？」
ベルモットは妖気な笑みを浮かべた。

「あーあ、今日は雨かよ。」

元太が教室の窓から外を見ながら残念そうに言った。

「天気予報では今日は一日中雨です。」

「じゃあ、今日のお楽しみ会は中止かな？」

歩美が残念そうなかおで尋ねた。

「外で出来なくても体育館や教室でやるんじゃないか。」

コナンは少し退屈そうに答えた。

「俺は外で野球がやりたかったぜ。」

元太が不満そうにした。

「元太君、文句言わないでよ。それに、外じゃなくても楽しい遊びは一杯あるよ。ねえ、哀ちゃん？」

歩美が哀の方を見た。

「……………」

哀は黙ってずっと俯いてる。

「哀ちゃん……？哀ちゃん……？」
歩美が少し大きな声で尋ねた。

「え、なに……？」
哀は顔を上げて尋ねた。

「今日のお楽しみ会の事だよ。」

「あ、その事ね……。今日は教室にやるんじゃないかしら？」

「……………」

コナンは黙って哀の方をじっと見た。

「オメエ、最近元気ないよな。どうしたんだ？」
下校途中、コナンは横を歩く哀に尋ねた。

「別に…、何も無いわ。」

「本当にか？」

コナンは再度、尋ねた。

「ええ…、本当に何も無いわ。」

「そうか…。もし、何かあったら俺や博士に言えよ。」

コナンがそう言つと、哀が立ち止まった。

「哀ちゃん、どうしたの？」

前を歩いていた歩美が哀に尋ねた。

「私、ちょっと用があるから…。」

哀はそう言い、近くの曲がり角を走って曲がって行った。

「どうしたんですかね？」

光彦が疑問に思つて呟いた。

「……………」。

コナンは走って行く哀を心配そうに見ていた。

第15章 く消えそうな心く

哀と別れたコナン達は帰路に着く為歩いていた。

「あれ、高木刑事と佐藤刑事じゃないですか？」
光彦が指を指しながら尋ねた。

「本当だ…。何してるんだろう？」

「行ってみようぜ。」

元太がコナン達に提案した。その後、コナン達は高木と佐藤の居る場所に走って行った。

「高木刑事、佐藤刑事…。」

歩美は走りながら高木と佐藤を呼んだ。高木と佐藤は声のする方を見た。

「やあ君達、今から帰るのかい？」

高木が近付いて来たコナン達に尋ねた。

「はい、高木刑事と佐藤刑事は事件の捜査ですか？」
光彦が高木と佐藤に尋ねた。

「まあね…。」

「事件の方は何か分かった？」

コナンは高木と佐藤に尋ねた。

「一人だけアリバイが証明されたよ。」

高木がコナンに伝えた。

「え、それって誰？」

「俳優の加賀見晋也さん。事情徴収の時、船の中をぶらぶら歩いてたって言ってただろう。何人かの船員が彼の姿を何回も見たとすだよ。パーティー会場には1、2回程しか戻ってないから多分犯人じゃないと思うよ。」

高木はコナンの質問に答えた。

「それで、今日は此処で何してるの？」

「下屋徹さんに話を聞きにきたのよ。まあ、結局何も聞けなかったけどね。」

今度は佐藤がコナンの質問に答えた。

「聞けなかったって何かあったの？」

「ゴルフに行つたみたいよ。自分の会社の会長が殺されたって言うのに暢気にゴルフなんて…。」
佐藤が呆れた顔をしながら言った。

「佐藤さん、そろそろ行きますか？」

「ええ、そうね。」

高木と佐藤は歩き出した。

「じゃあね高木刑事、佐藤刑事。」

歩美は手を振りながら言った。

「気をつけて帰るんだよ。」

高木がコナン達に聞こえる様に言った。

「はい。」

歩美、元太、光彦、大きな声で返事をした。返事をした後、高木と佐藤とは違う道をコナン達は歩き出した。

コナン達と別れた哀は俯きながらゆっくり歩いている。

「…何が目的なの？」

「目的…？それは、貴方が良く知ってるんじゃない？」

「私を…、殺すのが目的でしょ？」

「…まあ、正解かもしれないわね。」

「だったら、早く殺しに来なさい。私は逃げも隠れもしないわ。」

「じゃあ、また電話するから大人しくしててねシェリー。」

「（どうして、私を殺しに来ないの？）」

哀は組織の女が最初に電話を掛けて来た事を思い出していた。

「（それに、あの手紙…。まさか、私を殺す前に博士達を…。）」

「（私が…、この世から居なくなったら工藤君や博士やあの子達は助かるのかしら？）」

哀は立ち止まり、空を見上げた。その時、哀は誰かとぶつかった。ぶつかった時、哀の手から傘が離れて地面に落ちた。

「（雨…、私も雨みたいになえたらこんな苦労は…。）」

「はい、傘落としたよ。」

哀がそう考えていた時、綺麗な女性がにっこりと優しく微笑みながら哀に傘を差し出した。

「ありがとうございます。」

哀はそう言い、傘を受け取った。

「さっきはごめんね。私、よそ見してたから…。」

「いえ…、こっちこそよそ見しててごめんなさい。」

哀は女性に頭を下げて、それから走ってその女性から離れて行った。

第16章 く様子く

次の日、学校が休日なのでコナンはある場所に向かう為にバス停に居た。

「最近、哀君の様子が変なんじゃ。」

コナンはバスを待ちながら携帯で博士と話している。

「やっぱりな…。」

「やっぱりってどういう事じゃ？」

「あいつ、学校でも元気がないから…。」

「なあ博士、あいつの様子が変になった原因知ってるか？」

「いや、何も分からんわい。」

「あいつ、家ではどんな様子なんだ？」

「そうじゃの…、暗い顔をして何かに怯える様な様子じゃよ。」

「……………」

コナンは黙って聞いていた。

「どうすれば良いかの？」

「心配すんな…。俺が何とかするから…。」

コナンは博士を励ます様に言った。

「何とかってどうするんじゃ？」

「ちゃんと考えるから心配すんな…。あ、バスが来るからもう切るぜ。」

コナンはそう言い、電話を切った。電話を切ると、携帯をポケットに入れてバスに乗った。

30分ぐらいバスを乗ってコナンは鳥矢町にやって来た。

「（秘書の間宮さんの家はこの辺りのマンションだったな…。）」
コナンは手帳のメモを見ながら辺りを見回しながら歩いている。数分、歩いて目的のマンションを見つけた。マンションと言っても3階建ての小さなマンションだ。コナンは階段で2階に昇り、真ん中辺りの部屋で足を止めた。足を止めたコナンは、インターホンを押した。インターホンを押すと、中から女性の声が聞こえて来た。そして、ドアが開いて間宮が出て来た。

「あら、坊や毛利さんの所の…。今日はどうしたの？」

「事件の事を聞きたくて…。」

「探偵ごっこしてるんだ。さあ、入って入って…。」

間宮は優しく招きコナンを部屋に入れた。

間宮に招かれてコナンは部屋に入った。

「オレンジジュースしかなくてごめんね。」

間宮はジュースが入ったコップをテーブルに置いた。

「ありがとう…。」

コナンはジュースが入ったコップを受け取り、ジュースを一口飲んだ。

「…事件の話だね？何が聞きたいの？」

「最近の守屋会長の様子とかどうだった？焦った表情とかしてなかった？」

「そうね…、私から見えて変わった様子はなかったけど、焦った表情はしてたかな…。」

間宮はストローでジュースを飲みながら言った。

「どうして焦った表情をしてたの？」

「お金が原因よ…。あ、これは秘密だから私から聞いたって言わないでね。」

「うん、誰にも言わないよ。」

コナンはにっこりと笑った。

「会長、誰かにお金を渡すって言ってたんだけど、その代金が大きくて払えないって言ってたわ。会社の金を使う訳にはいかないってぶつぶつ言ってたよ。」

「ふーん…。（お金を渡す相手は奴等の可能性があるな。）」

コナンが間宮から話を聞いて考えた。

「その誰かってどんな人か分かる？」

「さあ、知らないわ。会った事もないし、見た事もないし…。」
間宮はそう言い、またジュースを飲んだ。

「……………」

コナンは間宮の部屋を見回した。

「どうしたの？」

「間宮さんのお部屋シンプルだね。」

間宮の部屋は日常に必要な物しか置いてない。

「私、余り必要ない物は置きたくないのよ。」

「そうなんだ…。」

コナンはジュースを一口飲んだ。

第17章　く口論く

「（守屋会長は奴等に金を渡していた可能性がある。じゃあ、殺された理由は金が渡す事が出来なかったから…。」

間宮の家を出たコナンは間宮から聞いた事を歩きながら考えている。考えて歩いていると、本屋が見えて来た。

「（…ちよつと本屋に寄ってみるか。）」

コナンは見つけた本屋に入った。

本屋に入ると客は数人しか居ない。コナンは目的のミステリー小説が置いてある本棚を見つけ、その本棚に近付いた。

「あれ、下屋さん？」

コナンはミステリー小説を読んでる下屋を見つけた。

「君は毛利探偵と一緒に居た子だよね？」

「うん、下屋さんは此处で何してるの？」

コナンは下屋に近付いて尋ねた。

「小説を読んでいたんだ。この本屋は私のお気に入りのお屋敷だね。君はどうしたんだい？」

「間宮さんに会いに来たんだ。」

コナンは笑顔を下屋に見せた。

「そういえば…、彼女は鳥矢町に住んでるって言ってたな。下屋は思い出しながら言った。」

「下屋さん、ミステリー小説が好きなの？」

「まあね…。」

「ねえ下屋さん、会長に変わった様子とかなかった。」

コナンは話を変えて下屋に尋ねた。

「会長に変わった様子か…。僕は会長と余り会った事ないからね…。それに、会長の事なら間宮さんや河下さんに聞いた方が良いと思うよ。」

「それに、僕は会長を殺したのは天王寺さんだと思うよ。」

「え？どうして…。」

コナンは少し驚いた顔を見せた。

「会長と天王寺さん、良く口論してたよ。私が止めに入ってた事もあるしね。」

「（口論か…。）」

コナンはそう心の中で呟いた。

「じゃあ、僕はそろそろ…。」

下屋は読んでいた本を本棚に直して、本屋の外に向かって歩き出した。

「……………」

コナンは黙って見送った。

電気もついていない真っ暗な部屋の壁にシェリーの写真が貼られている。シェリーの写真が貼られてる壁に誰かが近付いて来る。その人物は壁の近くに立ち止まり、シェリーの写真を壁から外した。

「……………」。

コナンが探偵事務所に戻ると、目暮と高木が探偵事務所に来ていた。

「警部殿、何か分かったんですか？」

小五郎が目暮に尋ねた。

「…調べた所、画家の天王寺作次郎が絵の事で会長と口論していたそうだ。」

「絵の事って…？」

「会長は天王寺さんの絵を高値で見知らぬ人達に売ってたそうです。」

「目暮の横に座る高木が小五郎に報告した。」

「じゃあ、犯人は画家の天王寺ですか？」
小五郎が目暮に尋ねた。

「いや、まだ分からんよ。」
目暮は否定して答えた。

「もう一つ分かった事があります。実は、守屋会長は誰かにお金を渡そうとしてたそうです。」
再度、高木が報告した。

「その誰かって誰なんですか？」

「今の所は何も分かってない。」
目暮がさらりと答えた。

「しかし容疑者は分かっているのに、会長を殺した動機は分からんし、犯人の手掛かりは分からんし……。」
目暮が唸りながら悩んでいる。

「……………」
コナンは黙って目暮達の話聞いていた。

第18章 くサインく

今日は強い風が吹いて、肌寒い一日…。

「（今日は清水さんと山本さんの所か…。）」

コナンは手帳を開きながら言った。

「（しかし、今日は寒いな…。）」

コナンは空を見上げて呟いた。空は何にも染まらない青空、太陽の日差しが街に注ぎ込まれている。コナンは手帳を閉じて、ポケットに手帳を入れて、コナンは歩き出した。

「おや、今日はコナン君はどうしたんじゃ？」

博士はクッキーの入った皿をテーブルに置いた。

「誘ったんですけど、家に行ったら出掛けてるって蘭さんが言って

ました。」

光彦が出されたクッキーを一つ食べた。

「このクッキー美味しいね。」

歩美がクッキーを食べながら博士に言った。

「そのクッキー、哀君が作ったんじゃない。」

「哀ちゃん、このクッキーに美味しいよ。」

「美味しいですよ、灰原さん。」

「うめえな……。」

歩美、光彦、元太は哀が作ったクッキーを絶賛した。

「ありがとう……。」

哀は雑誌を読みながらお礼を言った。

「けどよ、コナンは何処に行ったんだろうな？」

元太はテーブルに置かれたジュースを飲んだ。

「また、事件を追ってるんじゃないんですか？ 抜け駆けはコナン君の得意技ですから……。」

元太の質問に光彦が答えた。

「……………」

哀は黙って雑誌を見ていた。

コナンは奥穂町の高級マンションに来ていた。

「（流石、有名な小説家だな……。）」

コナンは高級マンションを見上げて思った。コナンが見上げてゐるマンションは奥穂町に新しく出来た高級マンションだ。此処に清水佳奈子が住んでゐる。コナンは高級マンションに入り、インターホンを押して清水にマンションの内部に入れてもらった。

エレベーターを降りたコナンは1番端の部屋を目指した。そして、1番端の部屋の目の前に着くと、立ち止まりインターホンを押した。

「いらつしゃい、坊や。」

ドアを開けて清水が出て来た。

「こんにちは…。」

「そんな所で立ってないで入って…。」

清水はコナンを部屋に招き入れた。

「うわ…、凄く広くて良い部屋だね。」

コナンは部屋に入って感動する様な声を出した。

「ありがとう…。それで、今日は私に何か用？」

清水が椅子に座ってコナンに尋ねた。

「事件の事を聞きたくて…。」

コナンも近くの椅子に座った。

「事件の事は警察に色々聞かれたけど、私は守屋会長とは余り親しくないから良く知らないのよ。」

「じゃあ、どうしてパーティーに？」

「女優の山本由里さんに誘われたのよ。由里さんは私が書いた小説のドラマに出てから知り合いになって、由里さんは守屋会長と知り合いだったから私は付き添いで行っただけよ。」

清水はパソコンを打ちながら答えた。

「守屋会長と会ったのはあのパーティーが初めて？」

コナンが再度、清水に尋ねた。

「ええ…。だから、私は守屋会長を殺す理由はないわ。」

「ふーん…。」

「あ…、そういえば君、毛利さんと一緒に居た坊やよね？」

清水がパソコンを打つのを止めて、コナンの方に視線を移した。

「う、うん…。そうだけど…。」

「今度、毛利さんのサイン貰える？私、ミステリーが大好きで、大学の時はミステリー部に入ってたんだ。」

「たぶん、貰えると思うよ。」

「やった…！」

清水は嬉しそうに言った。

「（あんなおっちゃんのサインが欲しいなんて…。）」

コナンは苦笑いをしながら思った。清水は口笛を吹きながら、上機嫌でパソコンを打ち始めた。

第19章 く茜色く

清水のマンションを出たコナンは電車に乗り、賢橋町に来ていた。

「（女優の山本由里さんは賢橋に住んでるって言ってたな。）」
コナンは手帳を開きながら歩いている。

数分、歩いてコナンは足を止めた。

「（此処か…？）」

コナンは少し疑問に思いながら足を止めた。コナンの目の前には一軒家が立っていた。

「（住所は合ってるよな。）」
コナンは手帳を開いて確認した。

「（とにかく、尋ねてみるか。）」

コナンはそう言い、インターホンを押した。

「はい…。」

家の中から女性の声が聞こえて来た。声がしてから数秒後にドアが開いた。

「あら、君は探偵さんと一緒に居た…。」

「江戸川コナンです…。」

コナンは頭を下げて挨拶した。

「今日はどうして此処に？」

山本はコナンに尋ねた。

「小五郎おじさんが話を聞いて来てくれて言うから僕が話を聞きの来たんだ。」

コナンはごまかす様に嘘を言った。

「じゃあ、入って…入って。」

山本は笑顔を見せてコナンを招いた。

「お邪魔します…。」

コナンはそう言って家に入った。

「（さっきの清水さんのマンションとは正反対だな。）」

コナンは家の中を見回した。家の中は近代的よりも昭和的な家だ。

「（この家、結構古いな…。）」

「あれ、どうしたの？さあ、座って…。」

山本は座布団を二枚床にひいた。

「うん…。」

コナンはひかれた座布団に座った。

「えーと、事件の何が聞きたいの？」

「守屋会長が誰かにお金を渡そうとしてたんだけど、山本さんは知らない？」

コナンは山本に尋ねた。

「うーん、聞いた事ないわね。」

山本は腕を組みながら考えた。

「じゃあ、守屋会長が怪しい人物と会ってた事とかなかった？」

「会長とは知り合いだけど、プライベートの事までは余り知らない

わ。それに、会長は守屋財閥の会長だから色んな人に会ってるから誰が怪しいとか怪しくないとか分からないわ。」

「そうだよね…。」

「ねえ、山本さんは女優なのにどうしてこんな家に住んでるの?」
コナンが疑問に思ってた事を尋ねた。

「私、マンションとかホテルとか余り好きじゃないのよ。こういう昔の感じが残った家が好きなのよ。」

「じゃあ、此処は山本さんの実家?」

「うん、そうよ…。最初、誰か来た時は同じ様な質問されるのよね…。」

山本はにっこり笑顔を見せた。

「（結局、何も分からなかったな。奴等の事も…。）」

コナンは溜息をついた。

「（もう夕方か…。そろそろ、帰るか。）」

コナンは空を見上げて言った。空には茜色の空が広がっていた。コナンは米花町に帰る為、駅に向かう為に歩き出した。歩き出した途端、コナンの携帯が鳴った。コナンはポケットから携帯を出した。

「はい、もしもし。」

携帯を出し、電話に出た。

第20章 く居場所なんて無い！く

「はい、もしもし。」

携帯を出し、電話に出た。

「工藤君、私…。」

電話の相手は哀からだった。

「どうした、灰原？」

「今から博士の家に来てくれる？」

「ああ、良いぜ…。」

「じゃあ、待ってるわ。」

哀はそう言い、電話を切った。電話が切れたのを確認すると、コナンは携帯をポケットに入れて歩き出した。

コナンが米花町に戻って来た時にはもう日が落ちて、辺りを真っ暗だった。コナンはインターホンを押さず、阿笠邸に入った。

「灰原、来たぜ…。」

コナンは阿笠邸に入って哀に言った。哀はソファから立ち上がってコナンに近付いた。

「…で、何の用だ？」

「話があつたのよ。」

「話つて、何の話だ？」

コナンは疑問に思い尋ねた。

「それは…。」

哀は言葉を止め、ポケットから折りたたみ式のナイフをポケットから出した。

「これよ…。」

哀はナイフをコナンに向けた。

「……………！！」

コナンは驚いて声が出なかった。

「遅いなあ…、コナン君。何してるんだろ？」
蘭は時計を見ながら言った。

「ほっとけ、ほっとけ…。どうせ、博士の家に行ってるんだろ。」
小五郎がビールを飲みながら言った。

「それより、飯にしようぜ。腹が減っちゃった。」

「う、うん…。」

蘭は少し心配そうな声を出した。

「どういう事だよ？灰原…。」

コナンはゆっくり哀に近付き始めた。

「来ないで…！」

哀は声を上げて忠告した。コナンは歩くのを止めて、立ち止まった。

「どうしたんだ？何があったんだよ？」

「…こうするしか、こうするしかなかったのよ。」

「灰原落ち着け、一体どうしたんだ？」

コナンは哀を落ち着かせる様に言った。

「組織を抜けた私には幸せなんてなかったのよ。此处が私の居場所だと信じてたのに…。」

哀の瞳には涙が滲み出ていた。

「私には最初から居場所なんてなかった…。」

「工藤君、地下の研究室のパソコンの横にUSBメモリーが置いてあるわ。そのメモリーの中には私が今まで研究して来たAPT-X4869の研究データが入ってるわ。それを、ジョディ先生に渡すのよ。FBIなら事情を話したら研究は出来るし、もしかしたら解毒剤が完成するかも知れないわ。」

「何言ってるんだよ…。」

「これが、私ができる事だから…。」
哀はそう言い、ナイフを自分に向けた。

「止める、灰原…！」
コナンは声を上げた。

「もう、こういう選択しか出来なかった。」
哀は震える唇でそう言った。

「さようなら、工藤君。」
哀はナイフを自分の胸に向けて動かした。

「灰原…！！」

第21章　く迫るく

コナンが叫んでから数秒に哀はゆっくり目を開けた。

「く、工藤君…!!」

哀が目を開けると、ナイフの刃をコナンが素手で掴んでいた。コナンの手首から血が一滴、一滴床に落ちて行く。

「どうして、どうして止めるの？」

哀はナイフを床に落とした。

「バーロオ、お前に居場所なんて無い訳ねえだろう。」

コナンの手から血が流れ落ちて来ている。

「お前の居場所は此处にあるだろう？」

「哀君、帰ったぞ…。」

博士が買い物袋を持って家に入ってきた。

「どうしたんじゃ？」

博士は床の血を見て、コナンと哀に近付いて尋ねた。

「ちょっと手を切っただけだよ。」

「とにかく、手当が必要じゃ…。哀君、救急箱を取って来てくれ。」

「ええ…。」

哀はそう言い、救急箱を取りに行った。

「…これで、大丈夫じゃろう。」

博士はコナンの手に包帯を巻いた。

「サンキュー、博士。」

コナンは博士にお礼を言った。

「…灰原、そろそろ教えてくれ？ 一体、何があつたんだ？」

「…組織から此処に電話があつたの。」

哀は余った包帯を救急箱に片付けた。

「その話、本当なのか？」

「ええ…、本当よ。『やつと見つけたわ、シェリー』って…。」

「じゃあ、哀君の正体が奴等にはれたって事か…。」
博士は驚いた顔をした。

「それと、もう一つ…。」

哀はポケットから手紙を出してコナンに渡した。

「工藤新一を殺せつか…。」

コナンは手紙を見てそう呟いた。

「じゃあ、新一君の正体も…。」

「だろうな…。」

コナンは真剣な顔で手紙を見た。

「けど、引つ掛かるな…。」

「何が引つ掛かるの?」

哀が疑問に思いコナンに尋ねた。

「奴等はどうして俺達を殺しに来ないんだ?」

「え、どういう事じゃ?」

「奴等なら灰原や俺の正体が知ってるなら直ぐに殺しに来る筈だ。此処に電話を掛けて来たって事は住所も分かってる筈だ。」

「そうね…。彼等なら組織の事を知る人間を口封じの為に殺しに来る。家にまで来る可能性もあるわ…。」

哀は腕を組みながら考えた。

「何か理由があるかも知れねえな。俺達を直ぐに殺さない理由が…。」

「

「コナンはさらりと言った。」

「なあ灰原、電話の声は男か女かどっちだった。」

「女の人だったけど、声を変えていた可能性もあるけど……。」

「じゃが、奴等は何処で哀君の正体を……？」

博士は腕を組みながら考えた。

「船での事件時かも知れねえな。」

「どういう事じゃ？」

「実は守屋会長を殺したのが奴等の可能性があるんだ。」

「なんじゃと！」

博士は驚いた表情をした。

「……やっぱり、彼等の仲間が居たのね。」

哀は椅子に座りながら言った。

「やっぱりって……、お前知ってたのか？ 奴等が居るって……。」

「……気配を感じたのよ。彼等の独特なオーラを。」

「じゃあ、その時何で言わなかったんだよ。」

「確証が持てなかったのよ。気のせいだった可能性もあるから……。」

「……………」

コナンは何も言わず腕を組んだ。

「それで、犯人は分かっているのかね？」

博士が話を変えてコナンに尋ねた。

「いや、まだだ……。けど、何人かは容疑者から外れるけどな。」

「彼等の仲間の目星がついてるの？」

「それはまだ分からねえけど容疑者は7人、その中に奴等の仲間が居る。」

「その7人って誰なんじゃ？」

「会長の世話係の河下昇さん、秘書の間宮麗子さん、部長の下屋徹さん、小説家の清水佳奈子さん、俳優の加賀見晋也さん、画家の天王寺作次郎、女優の山本由里さんの7人だ。」

コナンは哀と博士に伝えた。

「けど、加賀見さんと天王寺さんと清水さんは奴等の仲間じゃねえよ。」

「どういう事？」

「まず、加賀見さんにはアリバイがある。事件当日、彼は船の中をぶらぶらしてたって言ってる。その様子を何人かの船員が何回も見てたそう。次に天王寺さんだ、天王寺さんは会長と口論してた。理由は会長が天王寺さんの絵を見知らぬ人に高値で売ってたそう。そんな、直ぐに分かる様な動機を奴等は用意しないだろう？」

「ええ…、彼等なら動機なんて用意しないわ。」
コナンの質問に哀が答えた。

「じゃあ、清水さんはどうしてなんじゃ？」
博士がコナンに尋ねた。

「彼女は守屋会長と親しくはなく、パーティーに来たのは山本さんに誘われて来たんだ。彼女は山本さんとは知り合いって言ってたけど、それが全て嘘なら直ぐにばれる。そんな直ぐにばれる様な嘘は奴等はつかねえ…。」

「じゃあ、その他の4人に彼等の仲間が…。」

「たぶんな…。一応、明日からその4人の事を詳しく調べるつもりだけど…。」

「もし、奴等から電話があつたら俺に言えよ。この事はジョディ先生に伝えておく、何かあった時の為にな…。」

「ええ…。」

哀は真剣な眼差しをした。

第22章 く行動く

「どういう事ですかい？」

ポルシェの助手席に座るウォッカが尋ねた。

「FBIがあゝの事件の事を探ってる様だ。」

ジンは煙草を吸いながら運転している。

「じゃあ、FBIにギムレットの正体がばれたって事ですかい？」

「さあな…。だが、FBIも馬鹿じゃねえ。ギムレットの事がばれるのも時間の問題かも知れねえな。」

「…ばれたらどうするんですかい？」

「その時の算段は出来てる…。」

ジンは不敵な笑みを浮かべた。

「…話は大体分かったわ。」

ジョーディは携帯で誰かと電話をしている。

「本当はFBIに保護してもらった方が良いんだけど、そうになったら奴等は何を仕出かすかは分からないから…。」

電話の相手はコナンだった。

「そうね…。じゃあ、哀ちゃんの事は君に任せるわ。でも気をつけてね、何かあったら連絡ちょうだい。」

「うん…。」

コナンはそう言い、電話を切った。

コナンは携帯をポケットに入れた。

「それで、ジョディ先生は何て言ってたの？」
ビートルの後部座席に座る哀が尋ねて来た。

「何かあったら連絡して来れってさ。」

「そう…。それで、どうやって彼等の仲間を見つけるの？直接聞いても嘘をつかれるだけじゃない？」

「直接本人に聞くんじゃない。周りから聞くんだよ。とにかく俺は行ってくるからさ…。博士と灰原は此処に居てくれ。」

コナンはビートルの助手席側のドアを開けた。

「一人で聞きに行くの？」

「ああ…。お前を連れて行って本人に会ったら危険だろ？」

「あら、それなら貴方も危険じゃないの？彼等は工藤新一の存在に気付いてんだから…。」

「…分かったよ。」

コナンは降参した様に言った。

「え？下屋徹さんの事を……？」

下屋徹の家の近所の女性がコナン達を見下ろしている。

「うん……。最近、変わった様子とか、怪しい人物とかと会ってなかった？」

「そうね……。別に普通よ。でも、下屋さんのご主人の会社の会長が殺されて少し元気が無かったわね。奥さんも心配してたし……。」

「下屋徹って結婚してたの？」

「そうよ。此処に引っ越しして来た時は新婚だったわよ。最近、奥さんと子供を連れてゴルフに行ってたわよ。」

「ふーん……。」

コナンはそう言った。

第23章 く聞き込み

「話を聞いてたらその下屋さんは彼等の仲間じゃないわね。」
近所の女性と別れてから最初に哀が口を開いた。

「新一君はどう思うんじゃ？」
コナンの横を歩く博士が尋ねた。

「俺も下屋さんが奴等の仲間とは思えねえ…。奥さんや子供達が近くに居る場所で奴等の仲間や電話は受けられない。ましてや、危険だ。内容や会ってる所をばれたらアウトだからな。」
コナンは腕を組みながら考えている。

「…そうね。彼等の仲間なら周りに聞かれない様にするわ。まあ、盗聴器が仕掛けられてたら話は別だけど。」

「とにかく、下屋さんは奴等の仲間から外しても大丈夫だ。」

「じゃあ、次は何処に行くんじゃ？」
博士がコナンに尋ねた。

「女優の山本由里さんの所さ。」

博士のビートルに乗り、コナン達は賢橋町にやって来た。

「由里ちゃんの事…?」

コナン達は山本の二軒先の家を尋ねた。

「うん…。由里さんの事を知りたくて…。」

「由里ちゃんは偉いわね。今は人気女優だし、一人暮らしもせずに、お母さんの面倒を見てるのよ。」

「由里さんってお母さんと暮らしてるの?」

「ええ…。お父さんは由里ちゃんが子供の頃に亡くなって、ずっとお母さんと二人で暮らしてたから…。由里ちゃんが休みの日は二人で一緒に出掛けたりしてるわ。」

「由里さんは一人暮らしとか考えなかったの?」

コナンの横に居る哀が尋ねた。

「お母さんが勧めたんだけど、由里ちゃんが嫌がったのよ。」

哀の質問におばさんが答えた。

おばさんと別れたコナン達は博士が運転するビートルで帰路に向かっていた。

「彼女も奴等の仲間じゃねえな。」

ビートルの助手席に座るコナンがさざりと言った。

「私もそう思うわ。」

後部座席に座る哀が同感した。

「どうしてじゃ…？」

ビートルを運転する博士が二人に尋ねた。

「奴等の仲間なら一人暮らしを勧められたら拒んだりしねえよ。一人暮らしの方がリスクを負う必要は余りないからな。」

「なるほど…。」

博士は納得した様に言った。ビートルは米花町に向かってスピードを上げた。

第24章　五分五分

日が暮れ辺りが夜に染まり始めた頃、とある倉庫の中に2台のバイクが止まってる。

「これが、例の物ね。」

倉庫の中は真っ暗で誰が誰か分からない。

「これがあれば思い通りに動くわ。」

聞こえる声は女の声だ。女はトランクの様なケースをもう一人の人物から受け取った。

翌日、コナンは昨日と一緒に哀と博士と一緒に聞き込みに来ていた。今日は朝から曇り空が広がっており、雨が降ったり止んだりしている。

「今日は早く帰った方が良さみたいじゃない。」
博士は空を見上げて言った。

「テレビで夕方から雨って言ってたわよ。」
哀がさらりと答えた。

「そうみてえだな…。」
コナンは素っ気なく言った。

「横に住んでる河下さんの事を？」
コナン達は河下の住むマンションに来ていた。今、河下の隣人の男を尋ねている所だ。

「警察にも聞かれたけど、河下さんの会社の事とかは知らないぜ。」
隣人の男は面倒そうに言った。

「僕達、会社の事とかを聞きに来たんじゃないよ。河下さんの事を

聞きに來たんだよ。」

「え？」

男は少し驚いた顔をした。

「河下さんの家に誰か來たとか、誰かと電話してたとか、怪しい事とかしてなかった？」

コナンは隣人の男に尋ねた。

「うーん、河下さんは家に帰って來るのが遅いな。会社で世話係をしてるって言ってたからな。」

「家には誰も來ないの？」

「いや、休日には友人らしい人達が來ているみたいだよ。」

「その人達の顔を見た事ある？」

「ああ、あるよ。大学時代の友人が來ているみたいだよ。」

「その人達、黒い服は來てなかったの？」

哀がコナンの横から尋ねて來た。

「いや、普通の服だったよ。」

「じゃあ、怪しい人と会ってたりしてなかった？」

「俺が見る限りなかったな。それに、怪しい行動をするなら人目のつかない所でやるんじゃないか？俺にはあの人にはそんな行動はなかったと思うぜ。」

「どうしてそう思うの？」

コナンは疑問に思い尋ねた。

「あの人を知らない人はこのマンションには居ないし、困ってた事があつたら助けてくれるぜ。だから、河下さんが怪しい行動をしてたらマンションの誰かが見てるよ。」

「……………」

コナンは黙って聞いていた。

河下のマンションを出たコナン達は、マンションの目の前に止めてある博士のビートルに乗り、次の場所に向かっていた。

「…それで、どう思うの？工藤君は…」

哀が助手席で何かを考えているコナンに尋ねた。

「五分五分だな…」

「何がじゃ…?」

運転する博士がコナンの言葉に意味が分からなかった。

「河下さんが奴等の仲間か仲間じゃないかな…。灰原、お前はど
う思う?」

「優しい振りをしてるのが怪しいわね。そうやって、人を信じ込
める所が…。」

「……………」

コナンは腕を組みながら考え事をしている。

「次は何処に行くんじゃ?」

博士がコナンに尋ねた。

「鳥矢町だよ。秘書の間宮さんは鳥矢町に住んでるから…。」

第25章　酒の名前

コナン達は博士のビートルで鳥矢町に来て、間宮が住むマンションの近くにビートルを止めた。

「え？間宮さんの事を…？」

コナン達は間宮の隣人の男を尋ねていた。

「うん…。」

「間宮さんの事って言われてもな…、間宮さんは1ヶ月前に引越して来たから余り親しくないな。」
男は考えながら言った。

「1ヶ月前は何処に居たか知らない？」

「さあ、余り話した事もないしな…。」

「じゃあ、間宮さんを尋ねて来た人とか居ない？」

「見た事ないな…。彼女の部屋は何時も静かだよ。」

「……………」

コナンは黙って聞いている。

「あ、そういえば…、駐車場で彼女が誰かと電話してたのを聞いたな。」

男は急に思い出した様に言った。

「え？誰から…？」

コナンは男に尋ねた。

「それは分からないけど、なんか色々言ってたな…。」

「なんて言ってたの？」

「確か…、『やつと居場所を見つけたとか、あんな所に居たと思わなかったとか、あの男も哀れねとか』言ってたな。」

男は考えながら答えた。

「それ以外は何も言っていなかった？」

コナンは更に男に尋ねた。

「うーん、そうだな…、確か酒の名前を言ってたな。」

「お酒ってなんて名前のお酒？」

「なんて酒だったかな…。」

「…シエリー。」

コナンの横に居た哀がさざりと言った。

「そうそう、そのシエリーってお酒だ。」

「……………」

コナン達はその言葉に驚いた。

「シェリーをやっと居場所を見つけたって言ってた。あと、ジンツ
て酒の名前も言ってたな。」

「……………」

コナンは真剣な顔で聞いていた。

コナン達は男から話を聞き終わり、マンションから離れて博士のビ
ートルに乗っていた。

「…これからどうするの？」

後部座席に座って腕を組んでいる哀がコナンに尋ねた。

「どうするって何がだ？」

「彼等の仲間の間宮麗子って人の事よ。」

「心配すんな、考えはあるからさ。」

「考えて…？」

「話は博士の家でしようぜ。雨も降って来たし…。」
コナンは窓から外を見上げながら言った。

「本当じゃな…。」

雨の音が響き、ビートルに雨が当たる音が聞こえる。

第26章 く対決に向けてく

コナン達が博士の家に着いた時には、雨は止む事なく雨の勢いは上がっていた。

「ひどい雨じゃの…。」

博士が家の窓から外を見た。外は雨の降る勢いの音が聞こえる。それと同時に、雷の音も遠くで鳴り響いてる。そんな時、博士の家の電話が鳴った。雨と雷の音に合わせるかの様にコール音が1回…、2回と鳴った。

「はい、阿笠ですけど…。」

3回のコール音が鳴る前に哀は受話器を取った。

「いい子にしてた、シェリー？」

受話器からは組織の仲間の女の声が聞こえて来る。

「何か用でもあるの？」

哀は女の言葉を無視して尋ねた。

「…明日正午に杯戸倉庫に来なさい。もちろん、一人で来るのよ。一人で来なければどうなるか分かるわよね。」

「ええ…、分かったわ。」

哀はそう言い、電話を切った。

「電話…、奴等の仲間からか？」

哀が電話を切ってからコナンが尋ねた。

「ええ…、明日正午に杯戸倉庫に一人で来なさいって言ってたわ。」

一人で来ないと私の周りの人を殺すみたいよ。」

「杯戸倉庫か…。」

コナンは腕を組んでそう呟いた。

「どうするんじゃ、新一君？」

「先ずはこの事をジヨディ先生に話す。間宮麗子が奴等の仲間だつてこともな…。」

コナンはそう言い、ポケットから携帯を出して何処かに電話を掛け始めた。

「彼等の仲間が分かったって本当なの？」

とある部屋の一室で電話をしているジヨディが声を上げた。その声
に他のFBI捜査官達がジヨディの方を見た。

「うん、本当だよ。守屋会長の秘書の間宮麗子が彼等の仲間だよ。」

「でも、良く分かったわね。」

「間宮麗子が住むマンションの隣人が偶然電話を聞いたみたいなんだ。」

「へえ……。」

「それと、もう一つ話があるんだ。」

「何かしら？」

「今日、灰原に奴等の仲間から電話があつて明日の正午に杯戸倉庫に灰原一人で来いって電話があつたんだ。」

「その電話、その間宮麗子って人から？」
「ジョディが真剣な顔に変わった。」

「たぶんね。それで、ジョディ先生にちょっと頼みがあるんだ。」

第27章 く正体く

「明日、ギムレットが杯戸倉庫に現れるみたい。」
薄暗い部屋の中でベルモットが誰かと電話をしている。

「たぶん…、シェリーの事だと思うけど。」
ベルモットは携帯を持つ手と逆の手にカクテルが入ったグラスを持っている。

「…貴方ならどうする？」
グラスに入ったカクテルを一口飲んだ。

翌日…、ギムレットとの待ち合わせ1時間前になった。

「……………」。
哀は黙って時計を見た。

「哀君、そろそろじゃ…。」

「ええ…。」

哀は静かにそう言い、玄関に向かって歩き出した。博士とコナンも玄関に向かって歩き出した。

「本当に大丈夫かね？」

博士は心配そうな声で尋ねた。

「大丈夫よ…。危なくなったらFBIが助けてくれるんでしょ？そうよね、工藤君？」

「ああ…。昨日ジョディ先生達にちゃんと頼んだし、お前がやばくなったら倉庫に突入する様になってるから…。」

コナンは優しい笑顔を見せながら答えた。

「じゃあ、行つて来るわ。」

哀はそう言い、玄関のドアを開けた。

「灰原、お前を絶対に守るから…。」

「…頼んだわよ、名探偵さん。」

哀はそう言い終えると、玄関のドアを静かに閉めた。

「ジェームズ、全員集まりました。」

都内の駐車場にジョディやジェームズを含めた十数人のFBI捜査官が集まっていた。

「今回、我々の目的は杯戸倉庫に現れる組織の仲間を確保する事とその仲間に会うと思われる少女を守る事だ。彼等の仲間なら何をするか分らない。その少女を守る事が優先だ。」

ジェームズは捜査官達に言った。捜査官達は真剣な表情で聞いている。

「じゃあ皆、指示があつたら昨日言った場所で待機してて……。」
ジョディは捜査官達に伝えた。

待ち合わせ時間ちょうどに哀は杯戸倉庫に着いた。

「……………」

哀は何かを決意する様な目をしながら倉庫の大きなドアを開けた。倉庫のドアは鈍い音をしながら開いた。哀はドアを開けて中に入った。倉庫の中は物静かで、割れた窓ガラスから風が不気味な音をしながら入って来る。哀はゆっくりと歩き出した。その歩く音が倉庫の中に響き渡る。

「やっと来たわね、シェリー……」

倉庫の中から受話器越しから聞こえて来たあの女の声が聞こえて来た。哀は歩くのを止めて立ち止まった。倉庫の奥からゆっくりと靴の音が哀に近付いて来る。そして、哀の目の前にトランクの様なケースを持った間宮麗子が現れた。

第28章　く事件の犯人く

「ちゃんと一人で来たみたいね。」

「ええ…、貴方に言われた通りにしたわ。」

「…ふふ、驚いたわ。貴方がこんな子供に為ってるなんて。」「
間宮は不敵な笑みを見せた。

「何時…、私の事を分かったの?」

「あの船の事件の時だったわね。私、貴方の小さい頃の顔を写真で見た事があったから貴方を見て疑問に思ってたのよ。」

「それで、私の事を調べたのね。」

「ええ、そうよ。でも、貴方が小学校に行ってるなんて思ったなら笑いそうになったわ。」

間宮は少しだけ笑った。

「一つ聞きたい事があるの?」

哀は話を変える為、間宮に尋ねた。

「あら、何かしら?」

「あ、杯戸倉庫が見えて来たわい。」

ビートルを運転する博士がそう言った。

「博士、車を止めてくれ。」

「分かった…。」

博士はコナンの指示に従い車を止めた。

「新一君、どうして車を止めたんじゃ？」

「奴等の仲間がああ倉庫の周りに居る可能性がある。もし、俺達が近付いたら殺される。」

「じゃが、倉庫の中には哀君が…。」

「心配すんな、博士。灰原にはちゃんと発信機と盗聴器を持たせたんだから…。」

コナンは耳に付けたイヤホンを指さした。

「今の所、危険な状態じゃないみたいだ。それに、危なくなったら

FBIが灰原を守ってくれるし……。」
コナンはイヤホンに耳を集中させた。イヤホンからは哀と間宮の話
し声が聞こえて来る。

「……それで、聞きたい事って？」

「あの船で起こった殺人事件、殺したのは貴方？」
哀は真剣な表情で間宮を見ている。

「そうよ……。あの守屋って言う会長は組織に金を渡してたんだけど、
急に金が無くなったって言うのよ。」

「……………」

哀は黙って話を聞いている。

「だから、脅しをかけてやったのよ。金を用意出来なければ殺すつ
て……。そうしたらあの会長、警察に組織の事をばらすって言うから

消してやったのよ。組織に逆らったらどうなるかをね…。」

「さあ、お話は此処まで…。」

間宮はさらりと言った。

「…そうだな。あとの話は警察でしよつぜ。」
哀から聞こえて来る声が変わった。

「あ、貴方…、シェリーじゃないわね。」
間宮は驚きを隠しながら尋ねた。

「ああ…。」

「誰なの？貴方、一体誰なの？」
間宮は声を上げて尋ねた。

第29章 く思わぬ展開く

「誰なの？一体、貴方誰なの？」

間宮は声を上げて尋ねた。

「……………」。

哀は不敵な笑みを浮かべながら手を自分の頬に近付けた。

「…誰なの？答えなさい？」

「知りたいなら教えてやるよ。」

哀は自分の頬を引っ張った。頬を引っ張ると、皮のような物が取れて違う顔が現れた。

「貴方、毛利小五郎と一緒にいた…。」

「江戸川コナン…、探偵さ。」

哀に変装してたのはコナンだった。

「お姉さんが呼び出したシェリーは俺の仲間と一緒に此処から離れた所で待機してるぜ。」

「……………」。

「さあ、あとは警察でじっくり話をしようぜ。事件の事も組織の事も…。」

「…私が犯人だって証拠もないし、君が聞いただけじゃ警察は私を逮捕できないわよ。」

間宮は勝ち誇った様な顔をした。

「僕、一人じゃ警察も信用しないけど……。」

コナンはポケットから盗聴器とICレコーダーを出した。

「……………！」

「この盗聴器から俺の仲間に聞こえてるし、ICレコーダーにはあなたの会話を録音させて貰ったぜ。」

「このICレコーダーを警察に渡したらお姉さんは逮捕されるよ。」

「逮捕されない方法はあるわ……。逃げれば良いのよ。」

「ふーん、そんな事が出来るの？」

コナンがそう言い終えると、倉庫の入口に沢山の人が集まって来た。

「FBIよ……。もう、逃げる場所はないわよ。」

ジョーディの声が倉庫の中まで響いた。

「FBI……、嵌めたわね。」

間宮は鋭い目でコナンを見た。FBI捜査官達が拳銃を構えながら一歩ずつ近付いて来た。

「……………。」

間宮はゆっくりと後ずさりし始めた。

「こんな所で捕まるわけにはいかないわ。」

間宮は小さな声で言うと、持っていたケースをコナン達に見せた。

「この中にはある薬が入ってるわ。この薬をばらまいたらどうなると思う…?」

間宮はケースをコナン達に見せびらかしながら笑みを浮かべた。ジヨディ達は歩くのを止めた。

「……………」

間宮はケースのロックを外し、ケースのドアをゆっくり開けた。開けた瞬間、ケースが光り出し…、

ドオン…、

その瞬間、倉庫の中から一発の激しい爆発音が聞こえて来た。

第30話　く悪魔の笑みく

ドオン…、

倉庫から大きな爆発音が聞こえて来た。

「な、何じゃ！今の音は？」

博士は驚きながら声を上げた。

「…倉庫の方から爆発音が聞こえて来たわ。」
助手席に座る哀が冷静に答えた。

「まさか、新一君に何かあつたんじゃ…。」
博士がそう言い終えると、哀は助手席側のドアを開けて外に出て、
倉庫に向かって走り出した。博士も慌てて運転側のドアを開けて、
倉庫に向かって走り出した。

倉庫の中は煙りで一杯に覆われてる。辺りは煙りで何も見えない。

「コナン君、大丈夫？」

ジヨディは近くに居るコナンに尋ねた。

「僕は大丈夫だよ…。」

「とにかく、此処から出ましょう。」

「うん…。」

コナンとジヨディは倉庫の出口に向かって歩き出した。

「あの爆発、貴方の仕業？」

ベルモットが誰かと電話をしながらとある地下駐車場を歩いている。

「え、知らない？貴方じゃないのね…？」
ベルモットは少し驚いた顔をした。

「分かったわ…。」

ベルモットはそう言い、電話を切った。電話を切り、携帯をポケットに入れた。

「結構良いシナリオだったでしょう？」

ベルモットの背後から女の声が聞こえて来た。ベルモットは立ち止まり、声のする方に振り向いた。

「貴方…、どうして此处に？」

ベルモットが振り向くと、そこには黒いコートを着た女が立っていた。その女は哀がぶつかった時に傘を拾ってくれたあの綺麗で優しいような女性だった。

「私も見に来たのよ。ギムレットの最期の姿をね…。」

「さっき言ってたシナリオって？」

「ギムレットを消す計画よ。」

女は悪魔の様な笑みを浮かべた。

「貴方がギムレットを殺したの？」

「ピンポーン、正解よ。あの女にシェリーが欲しがってる薬が入ったケースを渡すって言ったら凄く喜んでたわよ。まさか、そのケー

スを開けたら爆発する仕組みになってるなんて思わなかったでしよ
うね。」

「じゃあ、あの爆発はケースの爆弾が爆発したって訳ね。」

「そうよ……。まあ、これでFBIに捕まらなくて良かったわ。」

「……………」
ベルモットは黙って近くに止めていたバイクに乗り、エンジンをか
けた。

「でも、残念ね。シエリーが見つからなくて……、見つかったら殺
せたのにね。」

女はまた、悪魔の様な笑みを浮かべた。

「そうね……。」

ベルモットはそう言い終えると、地下駐車場の出口に向かってバイ
クを走り出した。

「……………」

女は黙ってベルモットの方を見ていた。そんな時、女の携帯が鳴っ
た。女はポケットから携帯を出して電話に出た。

「はい……。」

「俺だ……。」

「あら、どうしたの？ジン……。」
電話の相手はジンからだった。

「ギムレットの件の事だ。」

「大丈夫よ…、あの女は消えたわ。あの爆発で生きてたら奇跡だけど…。あとは警察にギムレットの家を探られる前に組織に関する情報を押収するだけね。」

「それは、俺がやる。」

「分かったわ…。」

女はそう言い、電話を切った。電話を切り、携帯をポケットに入れた。そして、女は地下駐車場の出口に向かって歩き出した。

最終章　　ゝ 眞実は闇空の中に… 　ゝ

コナンとジョディが倉庫を出た時には、他の捜査官とジェームズが待っていた。

「大丈夫かね…？」

ジェームズがコナン達に近付いて尋ねた。

「はい…、他の捜査官達は大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。誰も怪我はしてない。」

「そうですか…。」

ジョディは安心した様に言い終えると、灰原と博士がコナン達に近付いて来た。

「博士、灰原…。」

「大丈夫みたいじゃな…。」

博士は少し走って疲れた声を出した。

「彼等の仲間はどうしたの？」
哀がコナンに尋ねた。

「まだ、倉庫の中に居るかもしれないな。」
コナンが倉庫の方を見た。

「一応、警察には連絡したわ。」

ジョディはコナン達に伝えた。

「しかし、何故爆発が起きたんだね？」

「…間宮麗子が持ってたケースが急に光り出して爆発したんです。」

「自殺なの？」

哀がコナン達に尋ねた。

「まだ、わからねえ…。けど、自殺する様には見えなかったけどな…。」

それから30分ぐらいしてジョディが呼んで目暮警部達がやって来た。

「じゃあ、コナン達とジヨディ先生は偶然此処を通り掛かった時に倉庫から爆発音が聞こえて来たわけだな。」

倉庫の外でコナンと博士と哀とジヨディが目暮と事件の話をしていく。

「うん…。」

「しかし、君達はどうして此処を通ったんだね？」

「公園だよ。博士やジヨディ先生達と一緒に公園に行く予定だったんだよ。なあ、博士。」

コナンは少し焦りながら咄嗟に嘘をついた。

「そうなんじゃ…。公園に森林浴をしに行くつもりだったんじゃ。」

「森林浴ね…。」

目暮が疑う様な目でコナン達を見た。

「目暮警部…。」

倉庫から高木と見知らぬ刑事が出て来た。

「中の様子はどうだったんだね？」

目暮は高木達の方を見た。

「中は爆発の衝撃で窓ガラス等が割れていました。それと、倉庫の真ん中辺りに焼死体が発見されました。」

高木は目暮に報告した。

「…身元は分かったのかね？」

「守屋財閥の社員証みたいのがありまして、間宮麗子さんの物と判明しました。」

今度は見知らぬ刑事が報告した。

「じゃあ、その焼死体は間宮麗子の可能性があるな。」

「一応、焼死体を鑑識にまわします。」

「分かった…。じゃあ、引き続き調べてくれ。何か分かったら直ぐに報告してくれ。」

「分かりました…。」

高木と見知らぬ刑事はまた倉庫に戻って行った。

「ねえ、さつき高木刑事と一緒に居た人誰なの？」

コナンは高木達が去った後に目暮に尋ねた。

「彼は今日から捜査一課に配属された嶋村君だよ。」

「ふーん、そうなんだ…。」

闇空 ｝ D a r k s k y ｝

・ 完

最終章　く真実は闇空の中に……（後書き）

こんにちは紅佐洲飯です。

闇空　くDark skyくを読んで下さってありがとうございます。
す。

また、次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2145f/>

闇空 ~ Dark sky ~

2010年10月8日14時47分発行